日本ビジネス実務学会
JSABS
Japan Society of Applied Business Studies

第 48 回
関東･東北ブロック研究会会報

http://jsabs.hs.plala.or.jp/

2022［令和 4］年 2 月 12 日（土）、オンラインにて第 48 回関東・東北ブロック研究会が開催され、基調講演・ディスカッション、研究発表、実践事例報告に続き、総会が行われた。

今年度も昨年度に引き続き「ニューノーマル時代のビジネス実務教育」を研究会テーマとし、基調講演ではアフターコロナにおける授業設計に向けた講演と、参加者によるディスカッションが行われた。その後の研究発表や実践事例報告では、ビジネス環境やキャリア開発、インターンシップなど、今後のビジネス実務教育のあり方について、オンラインにおいても活発な意見交換を行った。

ご挨拶

「新時代に向けて」

第 48 回関東・東北ブロック研究会
実行委員長　周藤　亜矢子

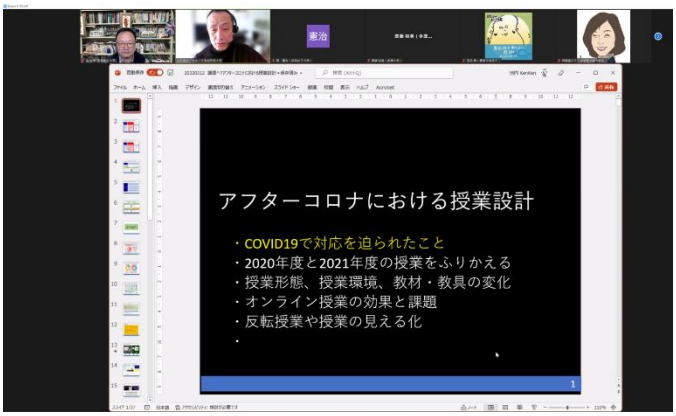
皆さま、本日はお忙しい中ご参加いただき誠にありがとうございます。昨年の研究会は初のオンラインでの開催となり、今年も引き続きオンラインで開催することとなりました。皆さまに直接お目にかかれないのは残念ですが、ブロックの壁を越えて気軽にご参加いただけることはオンラインのよいところであると実感しています。

さて、私たちはこれから目前であろうアフターコロナを見据えて「ニューノーマル時代のビジネス実務教育」を考え実行していかなければなりません。2 年間という長いようで短かったニューノーマル時代への準備期間。その間に社会は劇的に変化し、人の思考や行動も変化しました。従来当たり前であったことが当たり前でなくなり、普通の概念にも変化が訪れました。その速さはウイルス拡散のそれにも引けを取りません。新時代はもうそこまで来ています。そんな新時代を生き抜いていくご参加いただいた皆様方に本日の学びが何かの一助となりますよう心よりお祈り申し上げます。

基調講演 ・ ディスカッション

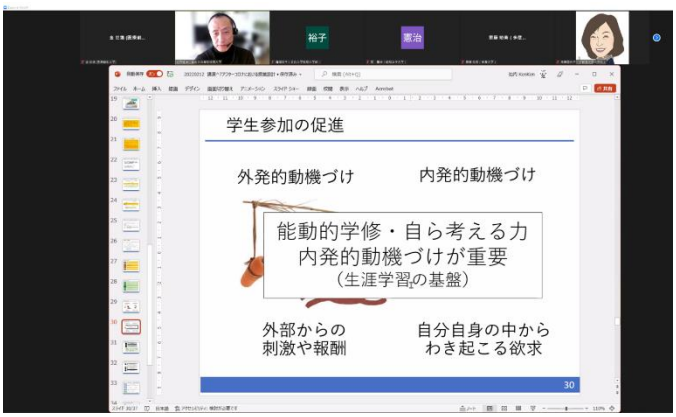
「アフターコロナにおける授業設計」

自由が丘産能短期大学
学長　池内 健治　氏



2020 年度から続くコロナ禍において、大学の授業はどのような対応を迫られたのか、池内氏の講演はその振り返りから始まりました。コロナ前とコロナ禍での授業の違いから、リモート授業が主となったこの 2 年間、教員の ICT スキルは飛躍的に向上したことが話されました。

文部科学省が全国の大学に対し 2020 年度後期に実施したアンケート調査によれば、授業をできるだけ対面に戻したい意向があるそうです。しかし、コロナ収束後もオンラインを活用した授業からは後戻りしないであろうことは、誰もが予想しています。



コロナ禍の授業は、コロナ前の教育活動や教育成果を再確認する機会となりました。オンライン授業の課題として、コミュニケーション不足が指摘されましたが、学生が抱く不満は、総じて一方的な授業方法に関するものでした。これまで教員の「聖域」であった授業も、オンライン化によってディプロマポリシーに沿った授業になっているかチェックができるようになったと言います。

今後はオンラインと対面双方の利点を生かし、1 コマの授業をオンラインライブ、オンデマンド、対面とを組み合わせて構築することも考えられます。変化の早い社会で生きるためには、学生が自ら考えて育つようにする必要があります。学生の内なる動機を誘発し、能動的学修にすることをあらためて痛感しました。

ICT を活用した授業にはまだ多くの課題がありますが、ウィズ・コロナ時代の大学教育に求められる要素として以下が挙げられました。

①教員間の連携と教職協働で教育研究し、効果的な教育方法を開発する

②教育資源を可視化し共同利用する

③社会生活の変化や仕事環境に対応した学生の学修成果を創出する

④教職員も大幅な変化に適応するため、必要なスキルをリスキリングして獲得する

講話後は、4～5 人のグループに分かれて「2022 年度の授業をどう組み立てて、いかに学修成果を上げていくか」をテーマにディスカッションをしました。各自がこれまでの授業設計・運営について振り返り、改善点や新たな視点を見出せたと思います。

研究発表

【発表①】

秘書の職務における感情労働
―聞き取り調査からの考察―

周藤　亜矢子（宇都宮大学大学院）

［研究対象領域］

【2】ビジネス実務研究　1)ビジネス環境とビジネス実務

第３次産業の発達やインバウンドのニーズが高まり「感情」が価値ある商品や企業の武器とされる社会になった。人を相手にする職業は、ほとんどが感情労働であり人間関係の中で業務に従事する秘書が、どのような感情労働をしているかインタビュー調査を行い、分析した要素の結果と事例の一部を報告した。

秘書は定型業務において、一般化された感情規則を元に感情管理を行っているが、非定型業務では場当たり的に感情管理行い感情規則の生成を行っていた。そのため秘書経験年数が長いとさまざまな感情規則が蓄積され秘書の経験値が上がることになる。

秘書は上司に帰属意識を持ち、それを評価の一部とした。秘書における上司の評価結果はサポート業務に還元されていた。評価はコミュニケーションや観察を中心に行われ、それらが上司の信頼度や秘書の業務へのモチベーションを左右した。また秘書職の感情規則の生成は普遍的な能力であるということが明らかになった。

【発表②】

企業インタビューによるキャリア意識についての考察

堀　良平（聖和学園短期大学）

［研究対象領域］

【1】ビジネス実務教育　3)教育方法の研究

仙台市内にあるＳ短期大学キャリア開発総合学科において、必修科目である『キャリアデザインⅡ』内で実施されている『企業インタビュー』を通して、学生の『キャリア意識』にどのような変化がみられるかを調査・分析し、短期大学におけるキャリア教育においてインターンシップ以外の職業体験の手法を考察できればと考え、今回発表を行った。

キャリア意識の測定については効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト；以下 CAVT）（下村ら：2009）を使用し、自由記述項目についても KH Coder を用いた言語化分析を行った。結果として、企業インタビューはある程度学生のキャリア意識向上に寄与しているものと推測されるが、そのスコアの上昇はわずかでコメント分析でも具体的な結果が得られなかったことから、引き続き講義内容の検討や追跡研究（進路決定状況等）を行い、その効果を具体的に検証していければと考える。

実践事例報告

【報告①】

「震災 10 年」を経た東北のために東京の大学ができること
ー「陸前高田フィールドワーク」を通じた試みー

安齋　徹（清泉女子大学）

［研究対象領域］

【1】ビジネス実務教育　2)ビジネス実務の教育プログラム開発と教材開発

2021 年度に、コロナ禍の中にあって東北のために東京の大学生ができることを模索した。「震災 10 年」後の風化の懸念、コロナ禍での修学旅行客の激減という課題に対し、未来価値として「SDGs」に着目し、陸前高田のブランド価値の向上と交流人口の拡大を祈念した。SDGs の 17 の目標に関連する人や団体にオンラインでインタビューを実施し、『陸前高田 SDGs 物語』という冊子を作成し、清泉女子大学として初めてとなるクラウドファンディング（目標達成率 140%）で調達した資金などで増刷し、全国のメディアや旅行会社などに発信した。①「史上最高のフィードワークにしよう」という目標設定、②信頼関係のある団体や企業との緊密な連携、③全員均等の役割分担と企画チームによる牽引という運営体制、が奏功した。参加者の満足度は高く、スキルの伸長も確認できた。

【報告②】

オンラインインターンシップにおける成果と課題

岡田　小夜子（大妻女子大学短期大学部）
池頭　純子（大妻女子大学短期大学部）

[研究対象領域]

【1】ビジネス実務教育　1)カリキュラム検討

本学では毎年１年生を対象にインターンシップを実施しているが､コロナ禍により 2020 年はオンライン、2021 年は対面とオンラインによるハイブリッド型のインターンシップを余儀なくされた。本報告は 2 年に亙るオンラインインターンシップの事例から、オンラインインターンシップに適するプログラムを分類し、それぞれの具体的な内容をまとめたものである。プログラムは課題解決型と講義型に分かれ、課題解決型の課題は業務関連課題と自己啓発課題、講義型の内容は就職講座と体験談に分かれる。

そのうちヒアリング調査によって、学生に最も効果があるとされるプログラムは業務関連課題と自己啓発課題の解決型であった。またオンラインインターンシップは対面のインターンシップに比べて学生の身体的・精神的・経済的な負担が少ないことから、次回からは講義型はオンラインに、課題解決型は対面によるインターンシップのプログラムで検討することを提案した。

研究会を終えて

「本当のニューノーマルへの模索」

関東・東北ブロックリーダー　宮田 篤

本年も昨年度に続き Zoom でのブロック研究会開催となりました。私どもが「ニューノーマル」「オンライン」「アフターコロナ」で直面する問題について考えるということは、目の前の学生を対象とした教育・授業が中心であると同時に、学生のことを抜きにしては考えられません。

学生は入学時には高大連携をより確実にする存在として、卒業時には企業や進路先との関係を発展させる存在として、大学教育を持続可能とするしなやかな柱となるための要となることを認識しつつ、コロナ禍の先を設計しなければならず、それは教育に携わる私どもの役目です。

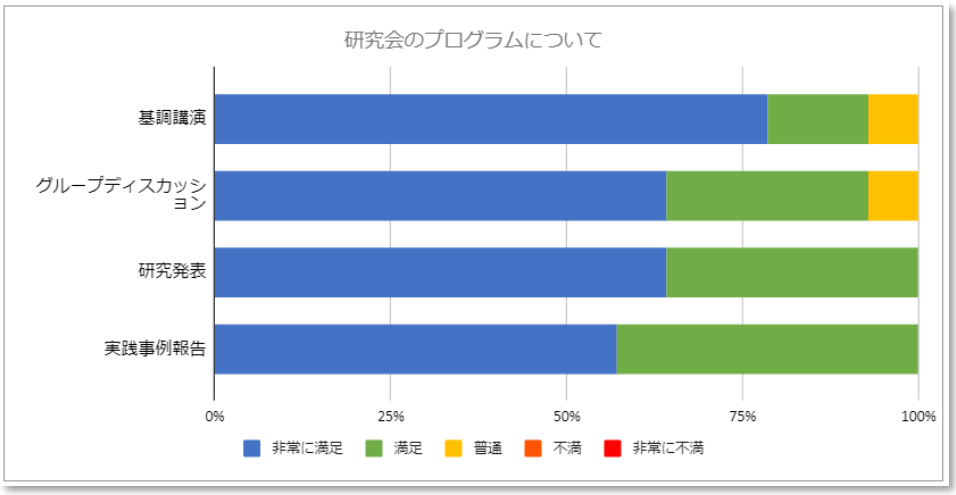
授業・教育のオンライン化により、教育資源の共有の重要さ、そして学修成果の「視覚化」「見える化」の必要性がより明確になったことにも気づかされたのではないでしょうか。本当のニューノーマルはコロナ禍終息後の私どもの行動と検証に掛かっており、研究会がその模索を共有し合う場となれば幸いです。

基調講演の講師であり当学会の元会長でもある池内健治先生、最新の教育現場での情報を取り入れたご研究を報告くださった発表者の皆さま、ブレイクアウトルームでのディスカッションへの参加を含め本日お集まりくださいました皆さまに厚く御礼を申し上げます。

本日の学びの成果が１年後に確認できる研究会となりますよう，ブロックの皆さまのご協力をお願いするとともに，来年こそは対面でお目にかかることができますことを心より願っております。

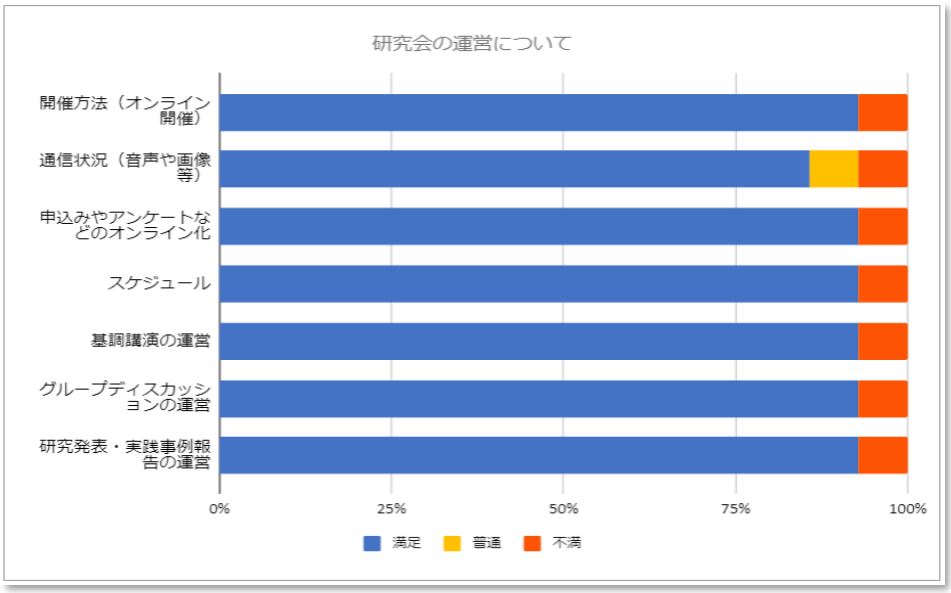
第 48 回　日本ビジネス実務学会　関東・東北ブロック研究会 アンケート結果

研究会のプログラムについて



基調講演･グループディスカッションは｢非常に満足｣｢満足｣があわせて 90%以上あり、満足度の高い結果となった。研究発表・実践事例報告は「非常に満足」は基調講演に比べて少ないものの「満足」とあわせると 100%であり、普通以下の回答は皆無であった。

研究会の運営について



研究会の運営全般について「不満」が少数いたが、大多数の意見は「満足」であった。

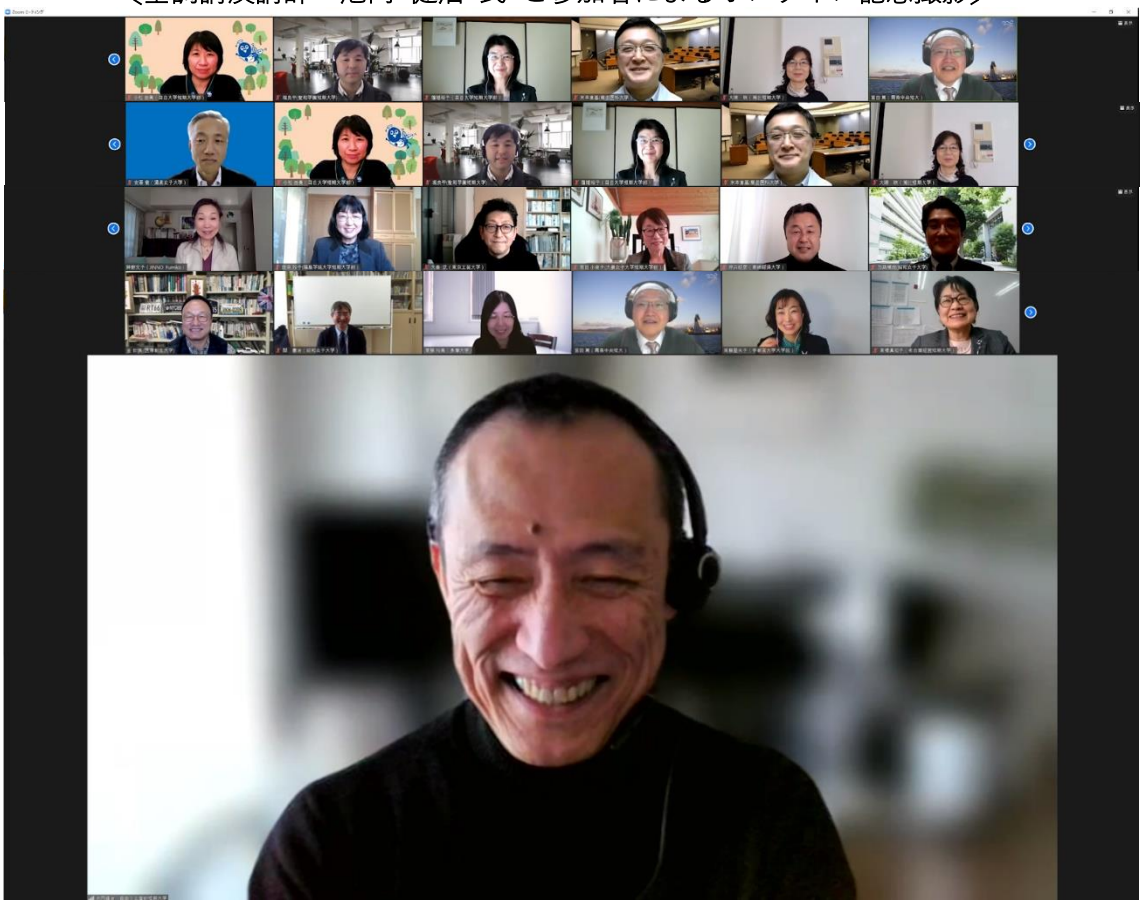
通信状況は「普通」が少数おり、視聴環境が良くなかった参加者もいたようだ。

自由記述

・基調講演、研究発表すべて、大変多くを学ばせていただきました。運営もスムーズで快適でした。ありがとうございました。

・大変勉強になりました。どうもありがとうございました。
・お疲れさまでした。ありがとうございます。久しぶりに楽しかったです。
・基調講演後に質疑応答はせずにグループワークに入ったように思いますので「３」にしました。
・ディスカッションの目的と手順が予め示されてスムーズに展開できたと思います。
（欲を言えば参加者に事前に知らされればさらに良かったと感じました）

〔基調講演講師　池内 健治 氏 と参加者によるオンライン記念撮影〕



編集後記

☆今年度のブロック研究会も昨年度に引き続きオンライン開催となりましたが、皆様のご協力のもと大きなトラブルもなく、無事に終了することができました。ブロック研究会にご参加くださった皆様、本当にありがとうございました （編集担当： 上岡 史郎、小松 由美）

第48回実行委員長： 周藤 亜矢子　　副実行委員長： 齋藤 裕美
運営委員： 大島 武、大塚 映、上岡 史郎、金 世煥、小松 由美、周藤 亜矢子、齋藤 裕美、
関 憲治、坪井 明彦、宮田 篤（50音順）